

ぼうさい

DISASTER MANAGEMENT NEWS

平成21年 9 月号
SEPTEMBER
2009 No.53

特集

いまこそ
災害に強い
まちづくりを

TOPICS

防災フェア2009
in はままつ

Active Woman

平原綾香

[ミュージシャン]

内閣府(防災担当)
Cabinet Office, Government of Japan

8月21日から24日に行われた
「防災フェア2009 in はままつ」

日本の 火山 vol.09

岐阜県・長野県

おん たけ さん

御嶽山

歌に歌われた、山の中の王



雲海にそびえる御嶽山（撮影：山下貢往）

御嶽山は、岐阜県と長野県の境、北アルプス（乗鞍火山列）の南端に位置し、「木曾の御嶽山は〜」と歌に歌われたことで有名な標高3067mの霊山。修験者の参拝が盛んで、富士山、白山、立山の日本三霊山では代わりに御嶽山を入れる説もあり、以前は御岳山とも書かれた。

火山群の活動はほぼ2万年前に終了し、長らく死火山と思われていたが、1979年、水蒸気爆発を起して活火山と認定され、以降も噴煙を噴き上げ、活火山、死火山、休火山という区別をなくすきっかけになった。また、1978年から南東山麓で地震が多発し、1984年9月14日にはマグニチュード6.8の長野県西部地震が発生した。

剣ヶ峰、摩利支天山、継子岳、継母岳の4峰があり、5つの火口湖には一ノ池から五ノ池の名前がついている。コバルトブルーに輝く二ノ池は日本で最も高地にある湖。

また、「御嶽山は滝の山」といわれるほど、この山から流れ出る川には滝が多い。

御嶽山

玄武岩、安山岩、デイサイトによる成層火山。現在、活動的火山および潜在的爆発活力を有する火山。噴火警戒レベル1（平常）。9月2日現在

ぼうさい^{9月号 (No.53)} CONTENTS

2 日本の火山 vol.09 御嶽山 [岐阜県・長野県]

4 特集

いまこそ災害に強い まちづくりを

— 首都大学東京大学院都市環境科学研究科教授 中林一樹

・災害に学ぶ— 夢野地区4防災福祉コミュニティ
— NPO法人中越防災フロンティア

・防災まちづくりの実際— NPO法人はままつ子育てネットワークぴっぴ
— 南御厨地区自治会
— たかしま災害支援ボランティアネットワーク「なまず」
— 社会福祉法人岐阜アソシア

12 Active Woman file 9
平原綾香さん[ミュージシャン]

14 Disaster Report
平成21年7月中国・九州北部豪雨
平成21年台風第9号
駿河湾を震源とする地震

18 TOPICS
防災フェア2009 in はままつ
第5回全国防災まちづくりフォーラム

25 Disaster management NEWS — 防災の動き
・平成21年度総合防災訓練
・平成21年防災功労者を表彰

28 過去の災害に学ぶ②
1858年4月9日飛越地震 その1
— NPO法人防災情報機構会長 伊藤和明

30 防災リーダーの素顔 第3回 NPO法人とちぎボランティアネットワーク 矢野正広

31 日本の知恵を世界に 第3回 地震防災リージョナル・カンファレンス

32 シリーズ 一日前プロジェクト[第10回] もし、一日前に戻れたら…

33 防災 Q&A
家庭や地域で防災について話し合う場合、どのようにはじめたらよいのでしょうか？
— 日本生活協同組合連合会組織推進本部震災担当 亀山 薫

34 記者の眼 時事通信社本社内政部 金友久美子

35 防災技術 Front Line ゲリラ豪雨を予測する SYNFOSS-3D スケジュール



中越地震で破壊された家 (写真提供: ネットワーク「地球村」)



中越地震で破壊された家 (写真提供: (株)アイジーコンサルティング)



子育てネットワークによる防災ゲーム (防災フェア2009 in はままつ)



視覚障がい者による防災訓練 (写真提供: NPO法人岐阜アソシア)

まちとは、わたしたちそれぞれ関わりで変わる。だから、まちづくりはできるし、必要なのです。大地震、地球温暖化が危惧される21世紀。わたしたちの生活を守るため、自分の住むまちを、災害に強いまち、いざというときにも安心して暮らせるまちにしたいと考える人も多いと思いますが、災害に強いまちづくりとはどういうものでしょうか。首都大学東京の中林一樹先生とともに考えていきたいと思っています。

いままちづくりを

防災まちづくりとは

近年、地震やゲリラ豪雨と呼ばれる局地的な大雨や台風による災害が多発し、多くの被害者が出ています。

地震や豪雨が災害ではなく、それによって財産や人の命が失われることが災害なのです。自分や家庭を守る取組として、災害に強いまちをつくる、防災まちづくりの取組が挙げられます。

1923年9月1日に関東大震災が発生し、東京や横浜に壊滅的な被害をもたらしました。これを記念して9月1日は「防災の日」と定められ、学校や自治会では防災訓練を実施してきました。それに参加し、自分を守る方法を学び、実践することも防災まちづくりの1つですが、それ以外にもさまざまな取組が各地で展開されています。

とくに、平成7(1995)年の阪神・淡路大震災は、全国に地震災害の脅威を感じさせ、危機感を高めたことから、全国各地でさまざまな防災の取組が始められる大きなきっかけとなりました。自主防災組織も各地で結成され、積極的に活動するようになり、さまざまな市民がボランティアとして災害対応に関わったことから、全国にさまざまな市民団体が結成され、防災の取組を始めていきました。それらのなかには全国

的なネットワークを形成して被災地支援を展開していくような動きも出てきました。そして、1月17日は「防災とボランティアの日」と定められています。

こうした人間の活動によって、発生した災害に対応し、被害の拡大を防ぐ取組が多様化してきましたが、1980年代頃から、災害に対して脆弱な市街地である木造密集地域では災害時の被害の発生を軽減し、安全な市街地に整備修復していく防災まちづくりの取組も進められていました。

関西では大阪・豊中のまちづくり、関東では東京・世田谷区の太子堂のまちづくりや墨田区の京島のまちづくりなどが有名です。このまちづくりは、地域の人によって街づくり協議会を組織し、防災訓練などのさまざまな活動とともに、路地を拡幅したり、ブロック塀を生け垣にしたり、路地の奥の宅地を広場に作り替えたりして災害発生時に消火、救出救助、避難などの活動がしやすくなるような街にしていく取組です。こうしたさまざまな防災まちづくりの取組を推進していくためにはどうしたらよいでしょうか。

阪神・淡路大震災から14年。これまでに、防災まちづくりを考えるためのアイデアや事例が色々とでてきています。そのいくつかを紹介しな

がら考えていきたいと思えます。

地域の防災活動の変化と新たな動き

阪神・淡路大震災以前では、多くの地域で防災活動といえば、自治会を中心とし、自主防災会や防災団、消防クラブなどが行っていた防災訓練でした。豊中や太子堂のような防災まちづくりは珍しい取組で、広まってはいませんでした。

しかし、阪神・淡路大震災やそれ以降の災害の経験を通じて、市民グループが自由な発想でさまざまな新しい防災の取組を始めてきました。それまでのお仕着せの「成功する防災訓練」ではなく、災害時のイメージを持つことができるように地図を使って自分の街で災害を想定して対応を考えてみる「図上訓練(DIG)」とか、失敗する防災訓練として、事前に訓練内容を知らせないで進める「発災対応型防災訓練」、さらに避難所を疑似体験する訓練など、防災活動の幅が大きく広がってきています。

また、阪神・淡路大震災では災害弱者(災害時要援護者)の被害が顕著であったことから、日本語の障がいや地震の経験がないために、要援護者になる可能性のある外国人が多く住んでいる地域では、外国人と密

いまこそ 強に災害に

に交流し、一緒に防災活動に取組んだり、また、高齢者や障がい者への配慮が根ざしている地域では、お年寄りや障がい者、子どもたちを意識的に巻込んだ防災活動に取組んだりする動きも広がっています。また、街中の公園などは災害時の活動拠点としても重要であることを実体験し、地域と行政が協働して、さまざまな防災設備を設置した「防災公園」を整備する取組も各地で進められています。

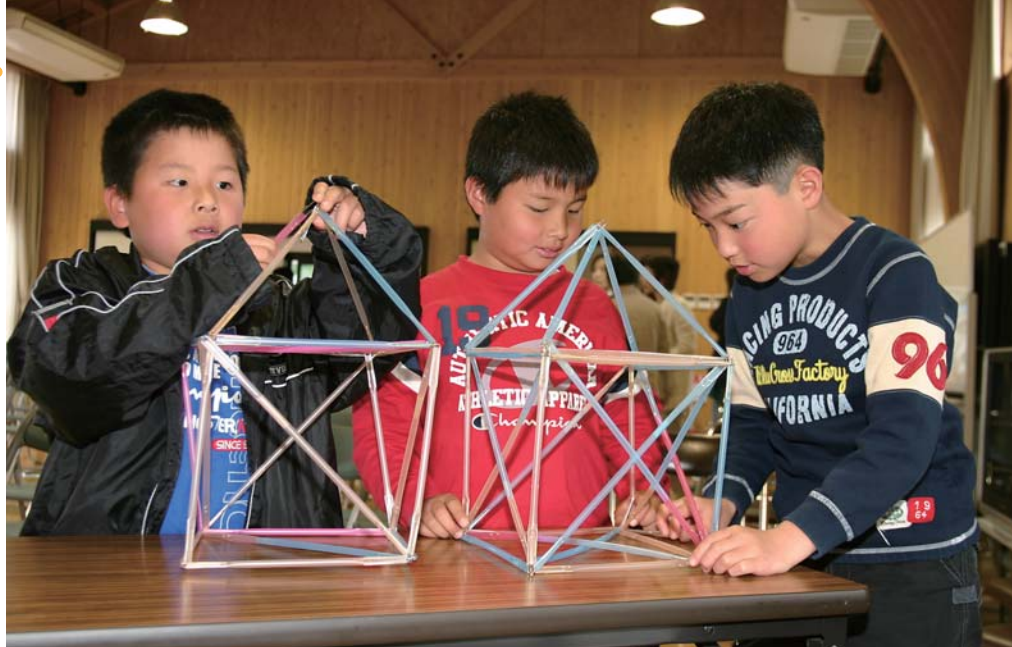
このように、災害がきっかけで生まれた活動や取組は、多様な発展をしながら、さまざまな場面で活動の幅を広げてきています。

防災まちづくり活動の2つの類型

地域型防災まちづくりと テーマ型防災まちづくり

防災まちづくりの活動は、自主防災会や自治会などをベースに居住地である地域を災害に強い街にしている「地域型防災まちづくり」と、特定のテーマやコンセプトに基づく防災活動を展開し、さまざまな地域の活動と交流し、広く防災学習や意識啓発活動を展開する「テーマ型防災まちづくり」に分類することができます。

さらに、防災の取組も、住宅の耐



震化や防災公園の整備、細街路の拡幅、耐震水槽や防災井戸の設置といった、設備や空間の整備によって被害の軽減を図る「ものづくり」に主眼をおいたハード型防災まちづくりと、災害時対応活動の工夫やそのための準備、その前提となす防災意識の形成や向上などを目指す「人づくり」や「ことづくり」に主眼をおいたソフト型防災まちづくりがあり

ます。このハード型防災まちづくりは地域型防災まちづくりとして行われることが多く、ソフト型防災まちづくりはテーマ型防災まちづくりとしての活動になっていることが多いといえます。

自治会などの住民の居住エリアを単位とし、そのエリア内での防災力を高める地域型防災まちづくりは被害軽減を実現するうえで基本となる重要な取組です。阪神・淡路大震災以降、「公助」である行政力の限界に対して「自助」「共助」の重要性が指摘されているのですが、地域型の防災まちづくりは「自助」「共助」の取組が基本なのです。

その一方で、ボランティア活動の



上：ストローによる壊れやすい家の模型実験（写真提供：たかしま災害支援ボランティアネットワーク「なまず」）
下：外国人とともに行う防災訓練（写真提供：南御厨地区自治会）

活発化などとともに、テーマ型の活動が活性化してきています。

テーマ型防災活動は「人づくり」「ことづくり」を通して、防災意識の向上や知識や技術の習得を目指す取組が多く、ゲームや落語など新しいツールを取入れるなど、平常時から防災に興味を持ってもらうために遊び心を投入したり、工夫された防災啓発活動が多様に展開されています。震災の経験を絵本や人形劇のシナリオに盛り込み、子どもたちに意識せずに教訓を伝える活動など、とても幅広く活動が展開されています。また、テーマ型では団体間でネットワークを作り、まだ防災のノウハウの少ない地域での活動を支援する、中間支援団体として活動しているケースも少なくありません。災害時にボランティアの送迎を行うボランティアバスを運営する活動など、専門的ともいえる活動まで奥行きも深まってきています。こうしたテーマ型の取組は現在の防災まちづくり活動を活性化させる役割も担っていると考えられます。

情報や知恵、ノウハウを共有し、被災経験を生かし、新しいアイデア、工夫など、防災に関する優れた取組を各地で広めることは、今後の防災まちづくりに重要な取組といえます。

一方、街路や公園・広場などの基



重油流出事故支援のボランティアバス（写真提供：NPO 法人とちぎボランティアネットワーク）

盤施設が整備されているうえに、ボランティアを行う風土が根づいている欧米では、テーマ型の防災活動が多いともいえます。そのため、地域型の防災活動について、日本から学んでいる国も多いようです。米国では日本の自主防災会や市民消防隊などを参考に地域での防災活動の仕組みを工夫したり、トルコでも1999年のマルマラ地震をきっかけに、日本の自主防災組織を参考に地域防災市民組織（MAG）が結成されてきました。海外では、むしろ日本の地域型防災まちづくり活動の意義を高く評価しているように思います。

「災害に学ぶ」

ここでは、災害時の活動や、復興の経験をきっかけに活動している防災まちづくり活動を紹介します。

From Disaster-1

「阪神・淡路大震災を契機に」

夢野地区4防災福祉コミュニティ
(兵庫県神戸市)

平成7年の阪神・淡路大震災をきっかけに、神戸市は全地区でコミュニティ活動としての防犯・防災に取り組みました。夢野地区の活動もその1つで、東山、ひよどり、熊野、菊水4地区の地域コミュニティが消防、警察、病院の協力を得て合同で訓練を行っています。その1つ、ひよどり地区防災福祉コミュニティでは、「私たちの街を私たち



4地区合同の防災訓練

中林教授のココがポイント

阪神・淡路大震災の後、神戸では不幸な犯罪も起きました。神戸市は防災と防犯の取組を強化しようとして「防災福祉コミュニティづくり」に取組んできました。世代を超えた取組で震災の教訓を次世代に引き継いでいます。

の手で守る」と訓練活動を積極的に展開しています。内容は救出(担架搬送)、救護(三角巾手当、心肺蘇生)、消火器、バケツリレー、放水消火、はしご車、炊き出しなど。震災後、コミュニティの創造的復興のために始めた夏祭りはいまでも続いています。

4地区合同訓練では、要援護者避難訓練や、土砂崩れの危険性も高い地域のため風水害の防災訓練も実施しています。内容は情報伝達、避難誘導、災害時要援護者避難、看護師の健康チェック、災害伝言ダイヤル利用、三角巾手当、AED、段ボールで作る避難所ファーンチュアと仮設トイレの設置、水防(土嚢積み)、給水、炊き出しなど、震災体験を生かして、実用的なサバイバル訓練を行っています。防災意識は高く、今年度は1千人規模の訓練になります。

From Disaster-2

「新潟県中越地震を契機に」

NPO法人中越防災フロンティア
(新潟県長岡市)

平成16年の新潟県中越地震を契機に市民による支援活動が行われ、被災集落では地域が協働で復興に取り組んできました。中越防災フロンティアは公と民の間で連携を図り、被災地のコミュニティの再生に向けて主に3つの活動をしています。

1つは被災後の全村避難時にバス路線が廃止された山古志・太田地区にコミュニティバスを走らせています。地域



雪かき道場

中林教授のココがポイント

高齢化した被災集落では集落をどのように元気づけていくのかが課題です。中越防災フロンティアは市民と公共の間で長期的な再生・復興を支援しています。どこかの被災地でも中間組織による支援と連携が重要となるでしょう。

の力で公共交通サービスを確保する画期的な取組です。年会費制で1年間バス代は無料。これを中心にさまざまな取組を「クローバープロジェクト」として、地域の自立と活力を高め、人と人をつなぎ、生きがいづくりを目指す活動を展開しています。2つめは、「雪かき道場」です。地震後2年連続での大雪、とくに全国で152人の人命を奪った「平成18年豪雪」を契機に、震災後のボランティアで生まれた都会と村とのつながりで、雪かきをしたこともない若者が楽しめるボランティアとして始まりました。村人が雪かき「師範」として教え、段級位制と修了証も作り、毎年多くの参加者が集まります。そうやって、高齢者の住宅の雪下ろしを進めています。

3つめは、中越地震の被災地見学による防災学習の支援です。地震に関するシンポジウムも各団体と共催で行っています。

「防災まちづくりの実際」

ここでは、各地で活動している
さまざまな防災まちづくりを紹介します。

Case-1

「防災ゲームで子どもとともにも」

NPO法人はままつ子育て
ネットワークびび

(静岡県浜松市)

「はままつ子育てネットワークびび」は、浜松市とその周辺地域での子育て支援のために活動を始めた組織で、情報交流をはじめとするさまざまな活動を行っています。東海地震の発生が危惧されている静岡県でこのNPOは、女性と子どもの視点で防災を考えているのが特徴です。そして、アトピーや障害を持つ



子どもの視点からの防災ゲーム

中林教授の「ココ」がポイント

幼児とその母親は、高齢者とともに要援護者と位置づけられています。この団体は弱者ネットワークで連携し、自ら災害を乗り越えていく防災活動を展開しています。この活動に、自助の原点を見ることができます。

子どもたちの災害時対応を含めて、防災に関するさまざまなワークショップ活動を行っています。

子どもを守る防災ワークショップでは、新聞紙のスリッパづくり、広告紙のコップづくり、ゴミ袋のレインコートづくりや、アルファ米試食、手作りランブや卓上コンロづくりなどを行っています。そして、防災ゲームなど、子ども自身が楽しみながら学習し、防災意識を高める工夫をしています。

また、最近では県外への出張ワークショップなどに広がっています。「子どもを守る防災ワークショップ」として、母親そして主婦としてのアイデアをふくらませた取組を創意工夫し、他のNPO法人や社会福祉法人、行政や災害ボランティアコーディネーターなどの関係組織との連携も強化しています。

Case-2

「言葉の壁を越えて」

南御厨地区自治会

(静岡県磐田市)

100年前に始まる日本人の南米移住は、20万人にも達したのですが、現在では逆に二世、三世などが20万人来日しているといわれています。日系南米人は静岡、愛知、群馬など各地に住んでいます。浜松もその一つで日系南米人は全住民の5%で集まって生活しています。JR磐田駅から東に4kmの南御厨地区では全住民の5人に1人のほりります。

中林教授の「ココ」がポイント

日本語がわからない外国人も要援護者として位置づけられてきました。この多文化共生型の防災訓練は何より重要な取組であり、効果的です。こうして日常の交流が高まることで、災害時に役立つのです。

日本語を話せない人、地震の経験がまったくない人も多く、地域防災訓練に参加した外国人は、内容が理解しにくいのが実情でした。

そのため南御厨地区自治会では、平成15年からの研修を経て、18年からポルトガル語の説明書の作成と通訳ボランティアを準備して、日系南米人のための防災訓練を行っています。

これには日系南米人、日本人、消防関係者が参加し、AEDによる心肺蘇生訓練、アルファ米の炊き出し、消火栓放水などの防災訓練を行い、災害時見守り助け合いカード、救護不要カード、要援護者台帳を作成し、災害時に向けてコミュニケーションを高めています。このような防災訓練をきっかけに、顔の見える関係が生まれ、交流も広がっています。



外国人とともに行う防災訓練

Case-3

「楽しく防災、 サバイバル」

たかしま災害支援ボランティア
ネットワーク「なまず」
(滋賀県高島市)

阪神・淡路大震災などをきっかけに滋賀県高島市で生まれたグループ「なまず」では、防災・減災のための「備えと構え」をテーマに、1人ひとりが被害を少なくする「減災」を目指した活動を行っています。

特に、学習・啓発活動としては、多彩なプログラムで出前講座を行っています。県内にとどまらず、大阪、京都、岐阜、福井、愛知などに広がり、年間50回に



楽しい防災漫才

中林教授の「コ」がポイント

この取組は「防災まちづくり支援活動」といえます。地域型防災まちづくりから飛び出して、さまざまな地域での防災まちづくりを支援しています。そのつながりは、実際の災害時は心強い支援ネットワークになるでしょう。

及んでいます。

内容は、防災漫才「備えあれば憂いなし」、腹話術「しんちゃんといっしょに備えしような」、「クイズで確認 減災あれこれ」、大型ロール紙芝居「地震その時 時系列」、「歌って確認、地域防災力」といった楽しいプログラム。災害図上訓練「DIG」、救出・救助図上訓練「HELP」、災害対応活動に役立つ「ロープワーク」など本格的なもの。さらに新聞紙、ごみ袋、牛乳パックなどのサバイバル活用法、サバイバル食べ物といったサバイバル術にも取り組んでいます。

また、災害時徒歩帰宅訓練「サバイバルウォーク」、災害ボランティアとしての力をつける研修活動、被災地への救援・支援活動、「高島発 阪神淡路大震災メモリアルイベント」など、実に多彩です。

Case-4

「障がい者とともに に、防災運動会」

社会福祉法人岐阜アソシア
(岐阜県岐阜市)

明治24年の濃尾地震を契機に生まれた視覚障がい者の施設、訓盲院に始まる岐阜アソシアは「視覚障がい者生活情報センターぎふ」を設立運営し、視覚障がい者とともに生きる社会を目指して活動してきました。

阪神・淡路大震災では約1カ月、支援活動を行い、その経験から、視覚障がい者は「災害弱者(災害時要援護者)」であると痛感しました。しかし、障が



障がい者とともに行う防災訓練

中林教授の「コ」がポイント

災害時の対応活動は、地域での対応活動が基本です。高齢化する日本では、多様な障がい者施設が増えていくでしょう。これらの障がい者も自助し、共助しあったり、これからの障がい者防災の基本となることでしょう。

いは単なる要援護者ではなく災害時にできることが必ずあると、「防災運動会」を開催しています。

地域の人々や県立岐阜盲学校の子どもたちともに行うもので、競技も混成チームで進めます。内容は地域の子どもの大声競争、煙体験ハウス、バケツリレー、救護者搬送など、災害に関する対応行動を取り入れています。また運動会前には、地元出身の落語家の「防災落語会」を催し参加者を楽しませています。

「まち発見隊」の活動では、障がい者と2人1組で町を歩き回り、障がい者のための施設・設備探しや危険地域探しなどを行っています。これらの活動で、障がい者の不安や健常者との垣根を取り除き、一緒になって防災活動を行うことを目指しています。

災害に強いまちとは

災害に強いまちとは、住宅の耐震化や不燃化が進み、まちの基盤である街路を救急車や消防車がいつでも活動できるように整備し、地域の人々が活動するための公園・広場が確保され、緑化され、貯水槽など防災設備が整備されているようなまちですが、しかしそれだけでは万全ではありません。

阪神・淡路大震災でも、最も多くの被災者を壊れた住宅から救出したのは地域の人々です。被災後の生活でも支えあい、助け合ったのは地域の人々でした。

災害に強いまちとは、街の施設や環境が安全で快適に整備されていることと同時に、地域の人々が助け合える（共助できる）ような関係が構築されていることが不可欠です。

例えば、平成7年の阪神・淡路大震災においては、平成5年からまちづくり協議会が活動していた、神戸市長田区の野田北部区域では、行政とともに大國公園やコミュニティ道路の整備を進めていました。震災で発生した大火災はこの大國公園とコミュニティ道路で食い止められたのです。さらに、震災後の復興にも野田北部まちづくり協議会を中心に神戸市と連携して復興に取り組むことができたので、神戸でも最も早く復興まちづくりが実現できたのです。

同じ神戸市の真野地区は、昭和50年代からまちづくり活動を展開してきた有名な街でした。人々と地域の企業との日頃の交流のおかげで、震災時も住民と企業のバケツリレーなどの消火活動で火災を消し止めました。街の復興も震災前に進めていたまちづくり活動をもとに、地域で力を合わせて取組んできました。また、まちづくりの交流のおかげで全国からの応援もありました。その震災から復興までの地域活動の経験やノウハウを全国各地へ伝えていきます。

これらの取組は、街路や広場の整備といったハードな取組と、住民の活動によるソフトなまちづくりを総合的に展開している復興（そして防災）まちづくり活動のモデルとして、各地で参考にされています。

東京における防災まちづくり

東京では、「地震に関する地域危険度」の公表を発端として、1980年代から、大都市の下町などに多く立地する木造住宅密集地域での防災を目的とした都市整備事業（地域型防災まちづくり）が始まりました。

そのモデル地区の1つとして、東京都墨田区の向島地域では、「一寺言問を災害に強い町にする会」というまちづくり組織ができ、行政と連

携して、公園整備や防災広場「路地尊」の設置を進めて路地の行止まりをなくしたり、建替えの際に建物を後退させて細街路を拡幅していく道路整備などを行ってきました。

「路地尊」とは、防災広場とそこに設置された防火用具庫・貯水槽などで、隣接する家の雨どいから雨水を地下に貯蔵し、井戸のように手動ポンプで汲み上げて、日常用水や災害用水に使用できるように工夫されています。「路地尊」という名前は「向こう三軒両隣」の路地の人間関係を尊び、それをいざというときに生かすという考えからつけられた名称です。隣接する京島地区にも、防火用水槽のある小公園を「〇〇一休」と命名して整備しています。その1つ



左：向島地区の路地尊

下：路地尊のあるまちづくり施設とその公園で遊ぶ子どもたち



「さくら一休」は桜が一本植えられており、街中の安らぎの小空間となっています。それらの周辺の建物では耐震化や不燃化を進めています。

東京都世田谷区の太子堂では、昭和57年、住民主体のまちづくり協議会が発足し、行き止まりの路地が多い街で二方向避難を確保するために防災小広場が作られました。これは住民により「トンボ広場」「アメンボ広場」などと名づけられて管理されています。また、そのほかにも、防火用水ともなるせせらぎのある緑道の整備、マンションの「建て方ルール」づくり、太子堂きつねまつりなどのイベントも行われました。家の不燃化も世田谷区の支援制度などを活用して着々と進んでいます。

こうして整備された広場や拡張された道路は、盆踊りや町祭の会場にも利用され、地域を1つにする場づくりにもなっています。

ソフト対策とハード対策

国や自治体の行うハードの整備と、住民主体の地域コミュニティのソフトの活動が一体となって初めて災害に強いまちが形成されるといえます。心意気(ソフト面)だけで火を消せといわれても無理で、それには可搬放水ポンプや水槽などの設備

整備(ハード面)が必要です。

地域社会と行政とがいかに信頼関係をもち、連携してまちづくりをすすめていくかが非常に重要です。それは、単にお金を出すだけでは機能しないことを意味しています。行政と地域と一緒に連携して「協働する」ことが防災まちづくりを実践し、継続するためには必要です。

広場を専門家が形よく作るのではなく、遊具はいらぬとか、みんなが知恵を出し合って決める。そうやって地域にシンボリックな空間、人が出会って交歓する空間ができれば、愛着がわき、次の世代にも残されていきます。地域の広場やコミュニティ道路の管理を住民が行い、息子、孫と草を取り花壇に花を植えに行く。また、自分たちで名前をつけてその名前と呼ぶ。そういういたる参加がまちづくりなのです。



毛布による搬送ゲーム(写真提供: NPO法人はままつ子育てボランティアぴっぴ)

また、ハード面での整備の役割を背負うのは、行政だけでは限りません。

例えば、高齢者の住む住宅の耐震補強や家具の固定を地域ぐるみで実施するなど、地域社会が取組むことのできる活動も多くあります。岐阜県恵那市では、家具転倒防止委員会を作り、ボランティア900名がお年寄り142名の寝室の家具を固定している。そんな防災まちづくりもあります。

災害に強いまちを 目指すために

地域の被害を軽減する、災害に強いまちづくりには、地域内部でのネットワークの強化も重要です。地域には自治会、学校組織、職能団体組織、企業などさまざまな組織があり、これらの多種多様な主体が一丸となり、



4 防災コミュニティ合同の防災訓練(写真提供: 夢野地区4 防災福祉コミュニティ)

災害に強いまちづくりを構想し、役割分担して取組むことが必要です。

また、地域を越えたネットワークも必要です。情報や知恵、ノウハウを教え合い、共有し、被災経験を活かし、新しいアイデア・工夫など、防災に関する優れた取組を各地で広め、刺激しあうことも重要です。

わたしたちは「防災」とか「まちづくり」というと難しく固苦しいもので、うっとうしい面倒くさいものであると考えがちです。

しかし、私たちの日々の生活、自分たちの安全を守ることが防災であることを意識して一人ひとりがまちづくりに取組む意識(自助)をもち、隣近所で力を合わせて楽しく取組んでいく(共助)ことが、これから災害に強いまちを目指すために必要なことだと思います。誰かが提案したアイデアを必ずやってみるところから、楽しみながらの防災まちづくりが始められるのです。

首都大学東京大学院
都市環境科学研究科教授

中林一樹

なかばやし・いつき ●1947年生れ。70年福井大学工学部建築学科卒業、75年東京都立大学工学研究科博士課程退学、75年同理学部地理学科助手、同理学部助教授を経て93年都立大学都市研究センター教授、都市科学研究科長を経て、2004年より首都大学東京都市環境科学研究科教授。工学博士。人と防災未来センター上級研究員。76年の酒田大火を契機に都市防災・復興研究。平成21年度防災功労者(防災担当大臣表彰)受賞

いま、私は感じています。 歌にふるさとができました

ミュージシャン

平原綾香さん



平成16年の新潟県中越地震。被災した人たちが耳にとめた音楽。それが『ジュピター (Jupiter)』。この歌を聴くと勇気つけられると、被災地からラジオにリクエストが寄せられ続けました。そして翌年から、長岡まつり大花火大会では、復興を願う花火とともに、この曲が人々の心に響きます。また、新潟県中越地震の実話を映画化した『マリと子犬の物語』の主題歌『今、風の中で』を作詞し、旧山古志村で歌いました。

ひらはら・あやか ● 東京都出身。2003年、ホルストの組曲『惑星』の『木星』を歌にした『Jupiter』でデビューし、2004年日本レコード大賞新人賞、2005年日本ゴールドディスク大賞特別賞。ドラマ『優しい時間』主題歌『明日』、NHKトリノ放送テーマソング『誓い』、映画『マリと子犬の物語』主題歌『今、風の中で』などをリリース。2008年、ドラマ『風のガーデン』では主題歌『ノクターン』を歌い、女優としても出演。2009年にはクラシックカバーアルバム『my Classics!』を発表。



ジャズとクラシックを学んだ私。 サクスが私の歌の基本です

「今、風の中で」を作詞しました。

また、3年後、映画『マリと子犬の物語』のために

「その時に見た、つらい状況の中でも復興に向けてがんばっている人たちの笑顔に、逆に勇気づけられました。その笑顔を想いながら、歌を作り歌っています」

今回、クラシック曲のカバーアルバムを発表した平原さん。なかでも、『新世界』には特別の想いがあると

「歌を歌うと、新潟の人々の笑顔や、復興に向けてがんばる人の姿が浮びます。歌にふるさとができたことを実感しています」

また、この曲は今年度、新潟の震災復興のイベント、「震災フェニックス」震災から立ち上がる文化の祭典「のテーマソングです。」

「音楽って、すごい力を持っている。それを、新潟のみなさんのおかげで、改めて感じることができました」

「多くの被災された方々に聞いていただいていることを知って、その方々の心に寄り添うことができるように歌っていききたいという気持ちになりました」

「被災した方々が主人公の歌にしました。そして、『ジュピター』の歌詞にもある『ひとりじゃない』という言葉を使いました」

被災した旧山古志村での試写会では、体育館に集まった人たちの前で歌いました。

「ふるさとである旧山古志村に帰ってこられた喜び、その大切なふるさとを元に戻す復興は、新世界を意味しています」

「歌を歌うと、新潟の人々の笑顔や、復興に向けてがんばる人の姿が浮びます。歌にふるさとができたことを実感しています」



2009年5月、JCBホールでのライブ。
ライブDVD『平原綾香 PATH of INDEPENDENCE at JCBホール』（ドリーミュージック）

お

父さんもお祖父さんもジャズミュージシャン。そして大学時代に『ジュピター』でデビュー。クラシックの原曲を初めて聴いたときには、ポロポロ涙が出たそうです。それでこの曲をデビュー曲に選んだといいます。

「作詞をしたことがなかったので、自分の想いを文章にして何枚も書き、それを基に作詞してもらいました」

息づかいが感じられる独特の歌い方は、サクスの吹き方がベースになっているといいます。

「本格的に歌を習ったことはありません。音楽大学ではアルトサクス

を学びました。それを吹くようなイメージで、歌を歌ったんです。だからサクスが私の歌の基本です」

この歌は、新潟県中越地震で被災された方々に愛され、ラジオでたくさんリクエストがありました。でも平原さんは、最初は実感がなかったといいます。

「多くの被災された方々に聞いていただいていることを知って、その方々の心に寄り添うことができるように歌っていききたいという気持ちになりました」

やがて長岡の花火大会では、復興のための花火「フェニックス」が打ち上げられるときに、毎年、この曲が流れることになりました。平成17年には平原さん自身が40万人もの観客の前で歌いました。

「音楽って、すごい力を持っている。それを、新潟のみなさんのおかげで、改めて感じることができました」

また、3年後、映画『マリと子犬の物語』のために

「今、風の中で」を作詞しました。

「その時に見た、つらい状況の中でも復興に向けてがんばっている人たちの笑顔に、逆に勇気づけられました。その笑顔を想いながら、歌を作り歌っています」

今回、クラシック曲のカバーアルバムを発表した平原さん。なかでも、『新世界』には特別の想いがあると

「歌を歌うと、新潟の人々の笑顔や、復興に向けてがんばる人の姿が浮びます。歌にふるさとができたことを実感しています」

また、この曲は今年度、新潟の震災復興のイベント、「震災フェニックス」震災から立ち上がる文化の祭典「のテーマソングです。」

「多くの被災された方々に聞いていただいていることを知って、その方々の心に寄り添うことができるように歌っていききたいという気持ちになりました」

やがて長岡の花火大会では、復興のための花火「フェニックス」が打ち上げられるときに、毎年、この曲が流れることになりました。平成17年には平原さん自身が40万人もの観客の前で歌いました。

「音楽って、すごい力を持っている。それを、新潟のみなさんのおかげで、改めて感じることができました」

また、3年後、映画『マリと子犬の物語』のために

「今、風の中で」を作詞しました。

「その時に見た、つらい状況の中でも復興に向けてがんばっている人たちの笑顔に、逆に勇気づけられました。その笑顔を想いながら、歌を作り歌っています」

今回、クラシック曲のカバーアルバムを発表した平原さん。なかでも、『新世界』には特別の想いがあると

「歌を歌うと、新潟の人々の笑顔や、復興に向けてがんばる人の姿が浮びます。歌にふるさとができたことを実感しています」

平成21年夏季に発生した 災害の被害状況等について

国内災害レポート

この夏は多くの災害が発生しました。
その主な災害について、
被害状況などを報告します。

平成21年7月中国・九州北部豪雨

大雨の状況

7月19日から21日にかけて、前線の活動が活発化し、山口県の防府では、1時間で72.5mm、24時間で275mmの雨が観測され、観測史上1位の値を更新しました。この3日間の総雨量としては、7月の月間降水量平年値に相当する大雨が防府(332mm)と山口(294.5mm)で観測されました。

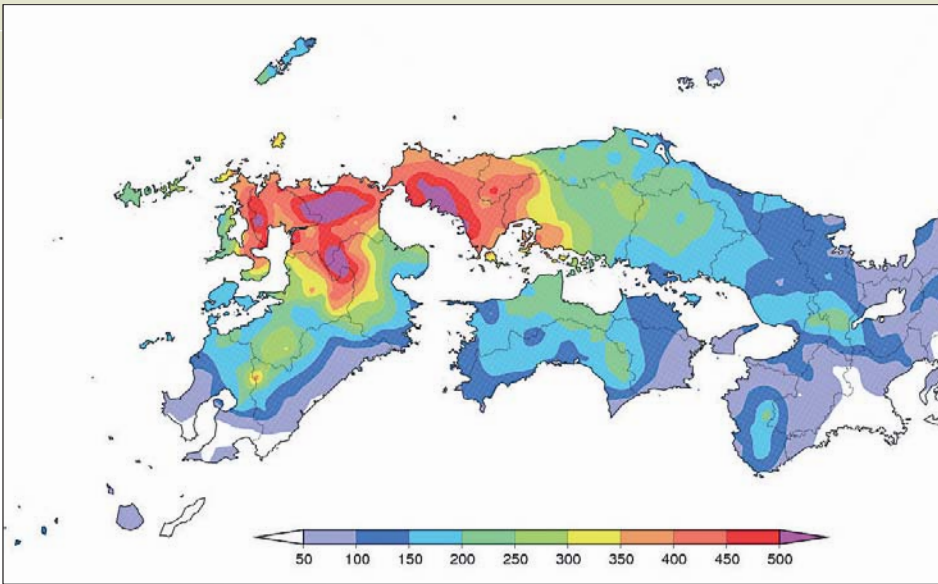
また、7月24日から26日にかけて再び前線の活動が活発化し、1時間雨量の観測史上1位の値が福岡県の篠栗(100.5mm)と飯塚(101mm)などで更新され、24時間雨量でも、福岡県の篠栗(326.5mm)、飯塚(338mm)、那珂川町の九千部山(333mm)などで観測史上1位の値が更新されました。3日間の総雨量

としては、7月の月間降水量平年値の2倍に相当する雨が、福岡県太宰府(618mm)と飯塚(568mm)で観測されました。

主な人的被害と住家被害の状況

この災害により死者31人、負傷者46人の被害が発生しました。特に山口県防府市では、土砂災害により特別養護老人ホームや同市下右田の国道262号線付近などで合計14人の方が亡くなっています。福岡県でも、県内各地で土砂災害や川・側溝で流されたことなどにより、10人の方が亡くなっています。

また、住家被害では、山口県と福岡県を中心とした20府県で、全半



期間降水量分布図(アメダス:7月27日~29日)(資料提供:気象庁)



防府市真尾の特別養護老人ホームでは土石流で7人が亡くなった



防府市下右田では国道262号線付近で土砂崩れが発生。4人が亡くなり、道路は全面通行止めになった

壊や一部損壊、床上・床下浸水の被害が発生しました。

その他の被害の状況

電力では、中国地方を中心に延べ約4万4千戸が停電し、現在も2戸が停電中です。水道は、山口県、福岡県、長崎県などで約8万7千戸が断水しましたが、現在は復旧しています。

道路では、九州道の太宰府IC（福岡IC間）で、土砂崩れに伴う通行規制が行われるなど、最大時には、高速道路、国道、県道あわせて、中国地方では73区間（22日）、九州地方では37区間（27日）の通行止めが発生しました。なお、通行止めとなった



福岡県大野城市では高速道路が被災し、2人が亡くなった

た国道262号線の迂回車両への対応として、7月26日より山陽自動車道、中国自動車道の一部で無料通行措置が実施されました。

農林水産関係では、農作物の冠水・土砂流入や、農地・農業用施設等の損壊などが発生し、林野関係や水産関係でも被害がありました（すべて9月15日現在）。

政府の主な対応等について

関係省庁等では情報収集体制を強化するとともに、林防災担当大臣を団長とする政府調査団を7月22日に山口県へ、27日には福岡県へ派遣



福岡県大野城市の高速道路被災箇所を調査する政府調査団

しました。調査終了後に、災害対策関係省庁連絡会議を開催し、調査結果の報告と被害・対応状況の情報共有を行い、行方不明者の捜索救助に全力を挙げること、応急対策・復旧等に政府一丸となった対応を行うことなどを申し合わせ、引き続き対応にあたりました。また7月29日には、

麻生内閣総理大臣による山口県と福岡県の現地調査が実施されました。自衛隊は、災害派遣要請を受け、

捜索・救助活動（山口県防府市、福岡県篠栗町）、給水支援活動（山口県山口市、福岡県宗像市、長崎県佐

世保市など）、孤立者救助（福岡県那珂川町など）、入浴支援（山口県山口市）を行いました。

山口県は7月21日を適用日として防府市と山口市に、福岡県は7月21日を適用日として飯塚市に、災害救助法及び被災者生活再建支援法に基づく支援金支給制度を適用しました。

なお、この平成21年7月中国・九州北部豪雨を含む、6月9日から8月2日までの梅雨前線による災害については、激甚災害に指定され、農地等の災害復旧事業等に係る補助の特別措置等が適用されました。

都道府県名	人的被害（人）				住家被害（棟）				
	死者	行方不明者	負傷者 重傷	軽傷	全壊	半壊	一部 破損	浸水 床上	床下
岩手県							4		6
宮城県									4
山形県								1	11
福島県								1	3
群馬県								1	1
岐阜県							1		50
静岡県									4
大阪府									8
兵庫県								5	60
鳥取県	1								5
島根県							2		78
岡山県			2	2	2	13	51		3
広島県	1		4	4	1		9	25	215
山口県	17		4	22	32	78	30	674	3,880
愛媛県									56
福岡県	10		4	10	11	8	70	1,368	4,087
佐賀県	1						14	77	1,015
長崎県	1						10	2	44
熊本県					1			1	18
大分県							1		1
計	31	0	8	38	47	99	192	2,155	9,549

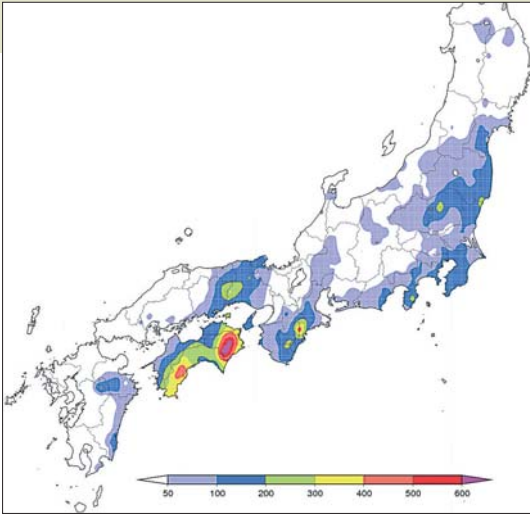
人的・住家被害の状況（消防庁調べ：9月15日18：00現在）

平成21年台風第9号

大雨の状況

8月8日に日本の南で発生した熱帯低気圧は、北上しながら9日21時に台風第9号となり、10日には紀伊半島の南へ進み、11日には東海、関東地方の南を東に進みました。

この台風周辺の非常に湿った空気の影響で、中国、四国地方から東北地方にかけて大雨となり、1時間雨量の観測史上1位の値が兵庫県の佐



期間降水量分布図(アメダス:8月8日~11日)(資料提供:気象庁)

用(89mm)で更新され、24時間雨量でも、佐用(327mm)、岡山県美作市の今岡(232mm)で、観測史上1位の値が更新されました。

主要人的被害と住家被害の状況

この災害により死者25人、行方不明者2人、負傷者23人の被害が発生しました。特に兵庫県佐用町では、冠水した道路で流されるなど、8人の方が亡くなり、2人の方が行方不明になっています。

また、住家については、兵庫県で165棟が全壊するなど18都府県で全半壊や一部損壊、床上・床下浸水の被害が発生しました。

その他の被害の状況

電力では、四国・近畿地方を中心に延べ約1万6千戸が停電し、水道では、兵庫県、岡山県などで約8千戸が断水しましたが、いずれも復旧しまし

た。

道路では、高速道路、国道、県道で全面通行止めとなった区間が、最大時の合計で75区間ありました。鉄道では、現在もJR西日本姫新線の佐用駅〜美作江見駅間で運転が中止されています。

農林水産関係では、農作物の冠水・土砂流入や、農地・農業用施設等の損壊などが発生したほか、林野関係や水産関係でも被害があります(すべて9月11日現在)。



被災した佐用町久崎



佐用町を調査する政府調査団

政府の主な対応等について

関係省庁等では情報収集体制を強化するとともに、林防災担当大臣を

都道府県名	人的被害(人)				住家被害(棟)				
	死者	行方不明者	負傷者 重傷 軽傷		全壊	半壊	一部破損	浸水 床上 床下	
福島県							1		14
茨城県							1		14
栃木県								12	38
群馬県							3	1	10
埼玉県								108	771
千葉県							3	58	186
東京都								38	117
神奈川県			1				3	2	14
長野県	1						1	103	254
京都府				1				8	101
兵庫県	20	2	3	4	165	972	2	335	1,493
奈良県								5	163
岡山県	1		2	2	5		2	319	418
徳島県	3		1		3		11	153	736
香川県								1	49
愛媛県			1			1	2		5
高知県							1	6	15
大分県				8		1	1	3	18
計	25	2	8	15	173	974	31	1,152	4,416

人的・住家被害の状況(消防庁調べ:9月11日11:30現在)

駿河湾を震源とする地震

团长とする政府調査団を8月11日に兵庫県および岡山県へ派遣しました。調査終了後に、災害対策関係省庁連絡会議を開催し、調査結果の報告と被害・対応状況の情報共有を行い、行方不明者の捜索に全力を挙げるとともに、復旧・復興対策に万全を期すことなどを申し合わせ、引き続き対応にあたりました。また、8月22日には麻生内閣総理大臣による兵庫県の現地調査が実施されました。

自衛隊は、災害派遣要請を受け、8月9日以降捜索・救助活動および給水支援活動(兵庫県佐用町、宍粟市、岡山県美作市)などを行いました。

8月9日を適用日として、兵庫県佐用町、宍粟市、朝来市および岡山県美作市に災害救助法が、兵庫県内全域および岡山県美作市に被災者生活再建支援法に基づく支援金支給制度が適用されました。また、応急仮設住宅が兵庫県佐用町で42戸建設されており、9月6日から一部入居を開始しています。なお、本災害については、激甚災害に指定され、農地等の災害復旧事業等に係る補助の特別措置等が適用されました。

地震の状況

8月11日5時7分、駿河湾を震源とするマグニチュード6.5(暫定値)の地震が発生、静岡県伊豆市、焼津市、牧之原市、御前崎市で震度6弱を観測しました。

主な人的被害と住家被害の状況

この災害により死者1人、負傷者319人の被害が発生しました。また、住家については、静岡県などで、半壊や一部損壊の被害が発生しました。

その他の被害の状況

電力は、中部地方で延べ約1万1千



静岡県牧之原市で一部崩落した東名高速道路(写真提供:中日新聞)

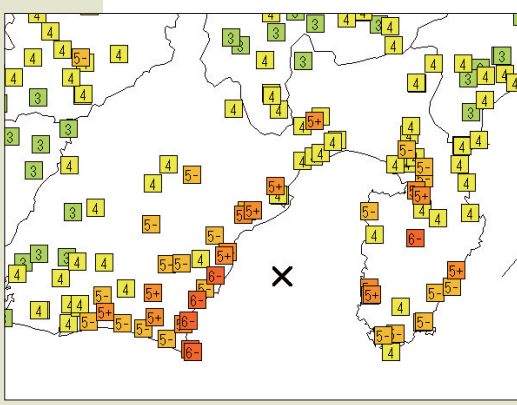
政府の主な対応等について

戸が停電し、水道では、静岡県などで約7万5千戸が断水しましたが、いずれも復旧しました。道路は、東名高速道路で土砂崩れに伴う通行規制が行われるなど、最大時11区間(8月11日)の通行止めが発生しました(すべて9月15日現在)。

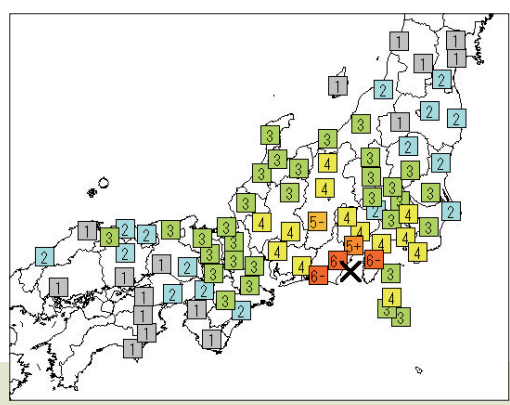
官邸では、緊急参集チームが招集され、被害状況の早期の把握などに

都道府県名	人的被害(人)			住家被害(棟)			
	死者	行方不明者	負傷者 重傷 軽傷	全壊	半壊	一部 破損	建物 火災
東京都				1			
神奈川県			4			1	
長野県						5	
静岡県	1		18 293		5	7,907	3
愛知県			1 2				
計	1	0	19 300	0	5	7,913	3

人的・住家被害の状況(消防庁調べ:9月15日18:00現在)



震度分布図(震央近傍の拡大図)(資料提供:気象庁)



震度分布図(各地域の震度分布)(資料提供:気象庁)

努めるとともに、自治体との的確な連携を図りながら、政府一体となって適切に対応することを確認しました。内閣府など関係省庁も情報収集体制を強化して対応を行い、災害対策関係省庁連絡会議で被害・対応状況の情報共有を行いました。

トピックス

TOPICS

防災フェア2009 in はままつ 開催



平成21年8月21日から24日、
内閣府、浜松市、防災推進協議会は、静岡県浜松市で
防災フェア2009 in はままつを開催しました。

TOPICS

内閣府、浜松市、防災推進協議会主催による「防災フェア2009 in はままつ」が、平成21年8月21日から24日、浜松市の「アクトシティ浜松」などで開催されました。8月11日に駿河湾を震源とする最大震度6弱の地震が発生した直後の、防災への関心が高まっている時期の開催でした。

会場は、浜松駅北口広場周辺（防災ホッとステージ等）、アクトシティ浜松コングレスセンター（防災アカデミー）、東ふれあい公園（防災キッズランド）と浜松まちづくりセンター・浜松市地域情報センター（防災キャンパス）などで、さまざまなイベントが行われました。駅前広場周辺には多くの団体などが出展し、駅のコンコースには、災害写真・防災ポスターコンクール入賞作品などが展示されました。

8月21日（金）

まずオープニングセレモニーが行われ、浜松市消防局消防音楽隊の演奏に続き、大森内閣府政策統括官（防災担当）、鈴木浜松市長、近衛防災推進協議会会長らの挨拶があり、さらに第24回防災ポスターコンクール防災担当大臣賞受賞者の高木和人さん（静岡県森町立宮園小学校6年）も

加わったテープカットで、防災フェア2009は始まりました。

防災ホッとステージでは、数々の「防災教室」を始めさまざまな団体による出し物がありました。まず、日本損害保険協会による「ぼうさい探検隊マップコンクール」の地元参加者の作品紹介がありました。続いて、お天気教室（岡村真美子氏）、地元の泉自主防災隊・和合町自主防災隊による避難所訓練紹介、防災教室「災害に強いまちづくり、人づくり」（重川希志依氏）が行われました。そして、防災教室「皆でつなげ、命のきずな」では、3月のマラソン参加中、心肺停止からAEDで命を助けられた経験のあるタレントの松村邦洋さんが参加し、多くの観客がトークを楽しみました。

8月22日（土）

防災教室「一日前プロジェクト（中川和之氏）」「津波から命を守る知恵と情報（山口勝氏）」「日本の地震災害（伊藤和明氏）」や防災人形劇、お天気教室（歌原奈緒氏）、避難所運営ゲームなどが開催されました。また、この日最後の防災教室「あなたのお家はカッチカチ？」正しい防災講座（福和伸夫氏）」には、漫才コン



防災ホッとステージに集う人々

ビのザブングルが参加し、コントで笑いをまじえながら耐震補強の必要性を訴えました。

また、浜松まちづくりセンターでは、「ぴっぴのドキドキ！防災ゲーム」が開かれ、子どもたちに防災の必要性が伝えられるとともに、「三遠南信災害ボランティア交流学習会」が開かれ、要援護者などに関する提言等が行われました。浜松市地域情報センターでも、木造家屋の耐震補強講習会が開催され、多くの建設関係者などが集まりました。

8月23日(日)

防災アカデミーでは、シンポジウム

「巨大地震に備える」が開催され、東海地震判定会の阿部会長の基調講演、著名な有識者によるパネルディスカッションに多くの来場者がありました。また、新潟県中越地震の実話に基づいた映画『マリと子犬の物語』の上映会が開催され、この地震の被災現場で救助活動にあたった経験のある斉藤さいたま市消防局課長から当時の状況の報告があり、次に映画の上映がありました。非常にたくさんさんの親子連れが集まり、被災地の人と犬の物語に涙しました。

浜松まちづくりセンターでは避難所運営ゲーム「ゴープ防災塾わがまち減災MAPシミュレーション」という参加型のイベントが開催され、多くの方々の関心を惹きました。さらに、東ふれあい公園とアクト通りの防災キッズランドには、22日、23日の両日、消防車、救急車、災害対応車、高所作業車などの展示が行われ、その試乗やミニ消防車の乗車体験には、多くの親子連れが訪れて列を作っていました。また、「消火器放水ゲーム」なども行われ、子どもたちは目を輝かせて参加していました。防災ホッとステージでは、ヤッターマン1号2号による撮影・握手会や

TOPICS



防火紙芝居に集まる子どもたち

ウナギイヌなどの登場、防災教室「家具固定講座(岩瀧幸則氏)」「家庭における防災対策(国崎信江氏)」「常識を疑え！間違いだらけの防災知識(目黒公郎氏)」があり、最後にクイズ大会「防災ものしり博士」の決勝が行われました。「防災ものしり博士」は、予選では伊藤和明氏(防災情報機構会長)が解説、鈴木静華氏(FMハローパーソナリティ)が司会、決勝では目黒公郎教授(東京大学生産技術研究所都市基盤安全工学国際研究センター長)が解説、歌原奈緒氏(気象予報士タレント)が司会をそれぞれ務め、出場者に防災に関するさまざまな知識が試されました。決勝では、子ども



NHKブースでお天気キャスター体験

もの部(小学校5・6年生)は10人、一般の部(中学生以上)は13人が出場し、優勝を目指して競い合いました。8月24日(月)には、防災教室「幸せ運ばう川西勝氏」防災アカデミーでは、企業防災シンポジウムが開催されました。月曜日の開催でしたが多くの参加者が訪れ、熱心に耳を傾けていました。そして午後、防災ホッとステージで消防音楽隊の演奏とともに、4日間の防災フェア2009 in in はままつは幕を閉じました。今回の防災フェア2009 in はままつは天候にも恵まれ、4日間で約9万3千人の人が集まり大盛況に終わりました。

巨大地震に備える

23日にはシンポジウム「巨大地震に備える」が、アクトシテイ浜松コングレスセンターで行われました。

まず東京大学名誉教授の阿部勝征



巨大地震シンポジウム

巨大地震に備える

シンポジウムと企業防災シンポジウム
2つのシンポジウムが開かれました。

さんが、「地震予知の現状と東海地震の予知」と題し、8月11日の駿河湾の地震について触れながら、東海地震と地震予知について基調講演をしました。

続いて、NPO法人防災情報機構会長の伊藤和明さんの司会によりパネルディスカッションが行われました。

まず、浜松市防災監の安形英敏さんは、家の耐震補強と家具固定など、自分の命を守るため、できることに取り組んでほしいこと、危機管理アドバイザーの国崎信江さんは、海外で「稲むらの火」を題材に防災教育を行った経験と、「すぐ火を消せ」「慌てて外に出るな」といった昔から言われてきた災害時の行動が本当に正しいのかといった見直しを行っていることを、NHK静岡放送局放送部長の三摩真己さんは、災害報道についての技術革新、デジタル放送で震度情

TOPICS

報が見られることをそれぞれ述べました。

また、浜松市自主防災隊連合会会長の中谷郁夫さんは、避難場所の確保と避難訓練の必要性を、内閣府大臣官房審議官の長谷川彰一さんは、阪神・淡路大震災のときに消防庁に勤務していた体験をもとに、当時の防災体制と現在の政府の地震対策について説明し、なぜ自助が必要か、そして防災意識を実践につなげてほしいことを、述べました。

また、阿部勝征さんは、前兆現象がない、震源が陸地でない場合は予知できないとし、緊急地震速報と「考えよう、数秒間でできること」という標語の重要性を指摘しました。

その後、来場者とパネリストの間で、活発な質疑応答が行われました。最後に伊藤さんは、住んでいるところでどういふ災害に遭うかは環境により違うということ、これを考えることが防災の出発点だとし、行政の限界を超える部分については、自主防災で対応してほしいと結びました。

企業防災シンポジウム

24日には、企業防災シンポジウムが



企業防災シンポジウム

開かれました。事業継続推進機構理事長丸谷浩明さんの基調講演「地域企業へのBCPの普及の現状と展望」では、事業継続の位置づけと、中小企業への普及のポイントが述べられました。

次に、富士常葉大学大学院環境防災研究科教授の池田浩敬さんの「静岡県における中小企業へのBCP普及の取組について」の講演に続き、パネルディスカッション「地元・近隣企業の事業継続への取組み そのから学ばも」が行われました。

パネラーは川田昇司さん(アイシン精機株式会社)、山口晃生さん(株式会社ミダック)、森俊幸さん(森精工株式会社)、松村勲さん(株式会社津冷凍)で、各社のBCPの取組について紹介し、企業の防災活動や災害後の目標復帰時間などが議論されました。

開催 防災教室

防災フェア2009 in はままつの4日間、10回の防災教室が浜松駅前「防災ホッとステージ」で開催されました。

防災分野で顕著な実績がある著名な講師陣に加え、お笑いタレント、松村邦洋さん、漫才のザブングルや気象予報士の歌原奈緒さんがゲストや司会の教室もあり、多くの来場者がさまざまな視点から防災について学びました。



防災教室

災害に強いまちづくり、人づくり

家を選ぶときには、まず防災の視点をぜひ入れてほしい。そして阪神・淡路大震災のように、大災害で救助するのは、地域の人たちです。まず自分と家族が無事であること。そして初めて、向こう三軒両隣の人を助けられます。災害の主役は市民です。富士常葉大学大学院環境防災研究科教授の重川希志依さんは、こう強調しました。



防災教室

一日前プロジェクト

昭和59年の長野県西部地震を体験し、それから災害・防災に取り組む時事通信社防災リスクマネジメントWeb編集長の中川和之さん。阪神・淡路大震災の取材から過去の災害体験者にインタビューし、「一日前プロジェクト」として、体験に学ぶ事例紹介を続けていきます。今回はそれを通して、メディアのできることについて語りました。



防災教室

皆でつなげ、命のきずな

浜松市消防局が119番通報、人工呼吸、心臓マッサージ、AEDの市民参加を訴え、緊急でない救急車利用について注意を喚起し、救命のデモンストレーションを行いました。続いて、タレントの松村邦洋さんによるトークでは、マラソンで心停止に陥りAEDで命を取りとめた話から、得意の物まねで観客を沸かせ、健康管理の大切さを語りました。



防災教室

津波から命を守る知恵と情報

NHKアナウンサーの山口勝さんは、『稲むらの火』を朗読し、地震の後の津波の危険性を指摘します。そしてこの絵本がインドネシア・スマトラ島沖大規模地震およびインド洋津波をきっかけに、インドネシアやアジア各地で翻訳されていることを紹介しました。また、緊急地震速報を紹介し、警報で多くの人が逃げないことの危険性を訴えました。



防災教室

日本の地震災害



気象予報士・タレントの歌原奈緒さんの司会で、NPO法人防災情報機構会長の伊藤和明さんが、日本はなぜ地震が多いか、地震のタイプ、切迫するといわれる東海地震、大地震の災害、建物の倒壊について話しました。そして自助、共助、公助の意味と、大災害では自主防災などの市民の活動がいかに大切かを述べました。

防災教室

家庭における防災対策



危機管理アドバイザーの国崎信江さんは、来場者に、地震が起こった状況などを語り、もし自分だったらと質問します。その答えを聞きながら、このイメージトレーニングが重要です、もしここで地震が起きたら、ということなどを常に考えてほしいと語りました。そして家具やコピー機が暴れまわる映像を見せて、家具固定の重要性を訴えました。

防災教室

あなたのお家はカッチカチ？ 正しい耐震講座



名古屋大学大学院環境学教授の福和伸夫さんは、家具の倒壊防止と耐震化の必要性を、模型を使って示しました。そして、漫才のザブングルが地震の揺れや家具倒壊を体験し、得意のネタ「カッチカチ」で観客と腕相撲して楽しませました。最後に福和さんは「明日地震がきても大丈夫なように、今日何かを始めよう」と強調しました。

防災教室

常識を疑え！ 間違いだらけの防災知識



歌原奈緒さんの司会で、東京大学生産技術研究所都市基盤安全工学国際研究センター長の目黒公郎さんは、地震の教訓は、まず建物の耐震性の確保と家具の転倒防止だといいます。また、M8クラスの地震が襲い数百万世帯が住居を失う可能性があると、地震が起こった何が起こるかを時間の経過とともに想像する能力を高めようと話します。

防災教室

家具固定講座



全日本地震防災推進協議会会長の岩瀧幸則さんは、阪神・淡路大震災の被災で人生がまったく変わりました。震災後、静岡に移り、東海地震の危険性を訴えます。さらに、大地震はピアノが天井を突き破るなど、予想以上に家具などが被害を拡大することから、特に家具転倒防止などの対策が重要であると強調しました。

防災教室

幸せ運ぼう



読賣新聞大阪本社科学部記者・気象予報士の川西勝さんから、制作した阪神・淡路大震災の記録「幸せ運ぼう」について、自身の震災体験とともに紹介がありました。また、震災時の取材では、事実の報道とともに教訓を書くような心がけるべきだと強調しました。

第5回全国防災 まちづくり フォーラム

8月23日(日)、防災フェア2009

in はままつの会場、アクトシティ
浜松コングレスセンターで、第5回
全国防災まちづくりフォーラムが開
催されました。全国各地の防災まち
づくりを行っている団体が集まり、
その活動を紹介して交流する催しで
す。

活動発表会

活動発表会では、浜松市内で活動
する5団体、静岡県内外で活動する
5団体が活動を発表しました。
浜松市の泉自主防災隊・和合町自
主防災隊は、「避難所運営組織づくり」
「避難所生活」がテーマの本格的な防
災訓練の取組を発表しました。
名古屋市の伊勢湾台風物語バリア
フリー上映委員会は、昭和34年の伊

勢湾台風アニメ

映画を視聴覚障害
者の方にも見聞き
できるようにする

取組を行い、情報のバリアフリー化の
重要性を訴えかけました。

浜松市の可美地区社会福祉協議会
は、「ふれあいサマーフェスタ」「ふれ
あい昼食会」を開催し、自治会や地
域の団体とともに地域の防災意識を
高める活動を発表しました。

湖西市災害ボランティアは、湖西
市では災害ボランティアコーディネー
ターの存在が知られていないため、
コーディネーター養成講座などを開催
し、災害に対応する技術を持つ人を
増やす活動について発表しました。

浜松市のNPO法人はままつ子育
てネットワークぴっぴは、女性と子ど
もの視点を取り入れた防災ワーク



泉自主防災隊・和合町自主防災隊の発表

TOPICS

ショップについて
の取組を発表しま
した(詳細は8頁
参照)。

愛知県豊川市の
豊川防災ボランティ
アコーディネーター
の会は、コージェ
イネーター養成講座関
連事業の取組を發
表しました。救護
訓練時にリアル感
を演出するため、

傷病者に「トラウマ・メイク」をした
トリアージ訓練が特徴的です。

愛知県豊橋市の豊橋防災ボランティ
アコーディネーターの会では、コージェ
イネーター養成協力や、大型紙芝居な
どを使う防災啓発活動、東海地震に
備えた防災マップづくり支援などの
取組を発表しました。

浜松市の浜北ボランティア連絡協
議会は、「経験を伝えつなげる」「地元・
地域が主体となる」「得意なこと、暮
しを守る」をキーワードに、災害ボ
ランティアセミナーなどのセミナー
活動などを発表しました。

浜松市北区災害ボランティアコー
ディネーター連絡会では、「防災すご

ろく」など、学校教育で子どもたち
と遊びながら防災意識を高める取組
や、災害時のボランティアセンター
の運営訓練について発表しました。

磐田市の南御厨地区自治会では日
系ブラジル人などの外国人と共同の
防災訓練についての取組を発表しま
した(詳細は8頁参照)。
最後に、第3回全国防災まちづく
りフォーラム「審査特別賞」受賞団体
の京都市の清水寺警備団が、最近の
「耐震型防火水槽」や周辺地域との
連携について報告しました。

基調講演

甲南女子大学名誉教授の奥田和子
さんにより、「災害・新型インフル
ンザに備える『食』の知恵〜家庭・対応
現場〜」として、講演が行われました。

奥田さんは、平成7年の阪神・淡
路大震災で、避難所などの食生活を



奥田和子教授の基調講演

調査した実績があり、野菜不足をどう補うかなどの栄養の問題について、家庭内などの備蓄の重要性と栄養面からの備蓄食料の見直しの必要性を提言しました。

表彰式

活動発表会で発表した団体のうち九団体の防災まちづくり活動に対して、審査と表彰式が行われました。

応用賞は南御厨地区自治会、発案賞は浜松市北区災害ボランティアコーディネーター連絡会、表現賞は豊橋防災ボランティアコーディネーターの会に贈られました。また、会場の投票による最多得票賞は、泉自主防災隊・和合町自主防災隊でした。そして、感謝賞は、伊勢湾台風物語バリアフリー上映実行委員会、可美地区社会福祉協議会、豊川防災ボランティアコーディネーターの会、浜北ボランティア連絡協議会の4団体、最優秀賞は浜松市のNPO法人はままつ子育てネットワークびっぴに贈られました。

審査員長の中林教授は、今回の発表で、「防災を楽しむ」、つまり、楽しんで防災に取り組むことで人々が集ま

り、アイデアがわき、継続も可能になること、「日常から防災を考える」、日常のつながりがいざというときに役立つこと、さらに「被害をいかに減らすかが基本」だと感じた」と講評されました。そして、「発表した方々が自身の安全を確保し活動を続けられ、災害を乗り越えられる、その力を確信した」と結びました。



講評を述べる中林一樹教授

審査員 ● 中林一樹(首都大学東京教授、審査委員長)、鵜飼愛子(サイボコ浜松代表)、浦野愛(NPO法人レスキュートックヤード常務理事)、児玉道子(わがやネット代表)、田尻直人(内閣府参事官)、根本敏行(静岡文化芸術大学教授)、藤井俊公(Webマガジン「まち・ひと・中央」発行人)、丸谷浩明(財団法人建設経済研究所研究理事)、宮崎稔(浜松市生活文化部防災対策課長)

TOPICS

トークセッション

「イツモの防災」隣の人と挨拶している日常」をテーマにトークセッションが行われました。コーディネーターは大阪大学大学院人間科学研究科准教授の渥美公秀さん。コメントーターは毎日放送ラジオ局記者で番組プロデューサーの大牟田智佐子さん。各出演者が、それぞれの活動を紹介し、イツモの防災、まちづくりについて話しました。

NPO法人まちづくり考房SHIMIZU理事の野口直秀さんは、静岡県清水市の商店街で、エコマネーや隣人祭りを通したつながりづくりを行っています。このような新しいシステムがこれからの場作りに役立つのではないかと、また、スローテンポで地域の商店街をコミュニティの場にしたいという考えを述べました。NPO法人はままつ子育てネットワークびっぴ理事長の原田博子さんは、女性と子どもの視点で防災を考えたワークショップ、ホームページによる情報交流を行っています。ITによる活動も、いろいろな人々とながらるのに役立つこと、そして自助を親の立場から考えていくことについて

話をしました。

さいたま市三橋コミュニティ役員清水恒男さんは、このコミュニティは、母子餓死事件がきっかけで活動が始まり、合同防災訓練の開催を契機に防災の意識が一気に高まったこと、一つの活動から輪が広がること、祭りなどの開催を通じて、地域団体のネットワークの連携が深まることについて発言しました。

大牟田さんは、「防災」と構えないことがいい。また、ここに行くとなかに会うとか、場があることで人のつながりができる。地域での活動が、自然と防災にも生かされますとコメントしました。

渥美さんは、日常生活のひとつひとつについて、防災の視点ではどう見えるか考えることなど、日常生活に防災を近づけることが重要である。そのためには、エコマネーや祭りなど、さまざまなツールを工夫して利用することで活動が活性化されていくのではないかとまとめました。

相互交流の時間

閉会のあいさつの後、発表団体等の相互交流の時間が持たれました。

平成21年度総合防災訓練

政府は、毎年9月1日の『防災の日』に、災害発生時の応急対策に関する準備の検証・確認と、国民の防災意識の高揚を図ることなどを目的として、関係地方公共団体等との連携により総合防災訓練を実施しています。本年度の実施状況は以下のとおりです。

政府本部運営訓練

首都直下地震を想定し、内閣総理大臣を始めとする全閣僚が参加して、地震災害応急対策の実施体制の確保等を図る訓練を行いました。

総理官邸においては、緊急参集チームの参集・協議、内閣官房長官会見、閣僚協議、臨時閣議、内閣総理大臣会見、緊急災害対策本部会議、防災担当大臣会見の一連の訓練を実施しました。

さらに、有明の丘基幹的広域防災拠点施設（川崎市江東区）に並木大臣政務官を本部長とする緊急災害現



各災害対策本部（総理官邸、有明の丘、川崎市役所）を結ぶテレビ会議

地対策本部を設置し、緊急災害現地対策本部合同会議等の訓練を実施しました。

現地訓練

八都府県合同防災訓練と連携した訓練

- (1) 現地訓練会場である神奈川県川崎市（東扇島基幹的広域防災拠点）に内閣総理大臣を团长とする政府調査団を派遣しました。
- (2) 首都直下地震を想定した八都府県市合同防災訓練と連携し、自衛隊、警察、消防、海上保安庁等による広域的な地震災害応急対策訓練を実施しました。
- (3) 災害派遣医療チーム（DMAT）が参加して、航空機等による広域医療搬送訓練を実施しました。具体的には、北陸（富山県）、北関東（栃木県）を域外拠点とするとともに、神奈川県内の複数の災害拠点病院から厚木基地へ患者を搬送する「域内搬送」に重点を置き、被災地内広域搬送拠点における患者受け入れ等の活動について検証を行いました。



総理官邸で行われた緊急災害対策本部会議



有明の丘で行われた緊急災害現地対策本部合同会議

Commendation

平成21年防災功労者を表彰

内閣府では平成21年度防災週間行事の一環として、
防災功労者(団体、個人)を表彰しました。

防災功労者内閣総理大臣表彰は、「『防災の日』及び『防災週間』について」(昭和57年5月11日閣議了解)に基づき、災害時における人命救助や被害の拡大防止等の防災活動の実施、平時における防災思想の普及又は防災体制の整備の面で貢献し、特にその功績が顕著であると認められる団体又は個人を対象として表彰するものです。

平成21年防災功労者内閣総理大臣表彰は4個人13団体が受賞し、9月2日(水)に総理大臣官邸で表彰式が執り行われました。また防災功労者防災担当大臣表彰は7個人8団体が受賞し、9月3日(木)に表彰式が行われました。

平成21年防災功労者 内閣総理大臣表彰受賞者

○個人

〔防災体制の整備〕

東京経済大学コミュニケーション学部教授
吉井博明(東京都)

関西大学環境都市工学部教授・理事
河田恵昭(大阪府)

公立大学法人大分県立看護科学大学学学長
草間朋子(大分県)

医師
島崎修次(東京都)

○団体

〔災害現場での顕著な防災活動〕

(平成20年岩手・宮城内陸地震における消防団の災害出動)
奥州市衣川区消防団(岩手県)

一関市消防団(岩手県)

栗原市消防団(宮城県)

(平成20年8月末豪雨における消防団の災害出動)
常総市石下消防団(茨城県)

八王子市消防団(東京都)

(平成20年岩手・宮城内陸地震における災害警備活動)
岩手県警察災害警備本部(岩手県)

宮城県警察災害警備本部(宮城県)

(平成20年岩手・宮城内陸地震における災害派遣活動)
陸上自衛隊東北方面隊災害派遣部隊・同配属部隊・同支援部隊(宮城県)

航空自衛隊航空支援集団(東京都)



内閣総理大臣表彰式の様子(総理大臣官邸)



内閣総理大臣表彰式

〔防災体制の整備〕

泉町三丁目地区連合自治防災会
（東京都）

株式会社静岡第一テレビ（静岡県）

たかしま災害支援ボランティア
ネットワーク「なまず」（滋賀県）

水俣市第3区自治会防災防犯委員
会（熊本県）

以上4個人13団体

〔災害時の防災活動〕

○団体

〔防災体制の整備〕

社団法人岩手県建設業協会一関支
部（岩手県）

栗原市地区栗駒赤十字奉仕団（宮
城県）

〔防災思想の普及〕

水谷東2丁目防災会（埼玉県）

東伊豆町大川区自主防災会（静岡
県）

曾根校区市民防災会（福岡県）

平成21年防災功労者 防災担当大臣表彰受賞者

○個人

〔防災体制の整備〕

新谷融（北海道）

中林一樹（神奈川県）

加藤明（静岡県）

野口宏（愛知県）

高田至郎（兵庫県）

神谷研二（広島県）

四宮治義（徳島県）

〔防災思想の普及〕

特定非営利活動法人にいがた災害
ボランティアネットワーク（新潟
県）

池上校区第2町内自主防災クラブ
（熊本県）

株式会社いとまんコミュニティエ
フエム放送（沖縄県）

以上7個人8団体

アクセス

平成21年防災功労者表彰の詳細
[http://www.bousai.go.jp/oshirase/
h21oshirase.html](http://www.bousai.go.jp/oshirase/h21oshirase.html)



防災担当大臣表彰式の様子（内閣府本府）



防災担当大臣表彰式

1858年4月9日 飛越地震

その
1

文：伊藤和明 (NPO 法人防災情報機構会長)

安政5年に起こり、飛驒と越中の被害が多かったこの地震は、安政の飛越地震と呼ばれます。この地震で立山連峰の山の一部が崩壊してカルデラに落ちたことは、よく知られています。山崩れ、土砂崩れが起き、堰き止められた川や天然ダムなどが、さらに災害を誘発しました。

1858年4月9日（安政5年2月26日）の未明、北アルプス立山連峰の西、現在の富山県と岐阜県の県境付近で、大地震が発生した。典型的な内陸直下地震であり、飛驒と越中での被害が大きかったために、「飛越地震」と名づけられている。

この地震は、古文書の記録などから、2つの地震が相次いで発生した、いわばマルチプルショックであったことも明らかになっている。飛越地震については、地震時の状況や災害の様相、地震後の情報収集や復旧状況などについて記された古

富山では、多数の家屋が倒壊し、各所で地盤の液状化による被害も生じた。震源から遠く離れた金沢や大聖寺でも、多くの家屋が全半壊した。とりわけ激甚な震害となったのは、飛驒地方である。神通川の上流部にあたる宮川や高原川の流域では、

なだれで岩石がぶつかりあつて火花を発生し、川筋が明るく見え、天然ダムが姿を現わした。

この地震は、Aクラスの活断層である跡津川断層の活動によるものであり、その規模は、従来M7.0（7.1（理科年表など）とされているが、近年、被害分布などをもとに再検討が進められた結果、M7.3（7.6と推定されている。またこ

文書や絵図が、数多く保存されている。また、立山の鳶崩れなど、大地に刻まれた災害の傷あとが各所に残されていて、自然と人文の両面から、その地震像や災害像を復元することができる。

強烈な揺れに見舞われた城下町の

跡津川断層に沿う村々の被害が甚大で、家屋の倒壊率が100%近くに達した集落もあった。飛越地震は、山岳地帯を走る跡津川断層の活動による地震だったため、山崩れや土砂崩れが多発し、崩壊した土砂が川をせき止めて天然ダムを

飛越大地震 PROFILE

プレート断層の活動による直下型地震

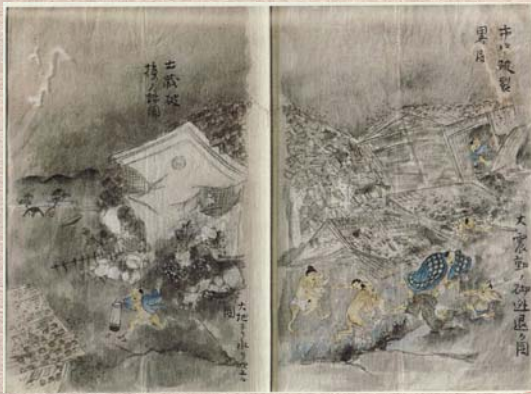
マグニチュード >>> 7.3 ~ 7.6 (未明)

死者 >>> 約 410 人

内訳 >>> 平野約 20 人、山間約 250 人

溺死約 140 人

全半壊家屋 >>> 約 2,700 戸



『地水見聞録』から市中破裂略図（富山県立図書館所蔵）



立山カルデラの全景（撮影：菊川茂氏）

生じたり、主要な道路が寸断されるなど、厳しい山地災害の様相を呈した。

飛騨の村々でも、各所で山崩れによって多くの家屋が埋まり、死者がでた。宮川や高原川、小鳥川などでは、川がせき止められていくつもの天然ダムを生じ、のちに決壊して下流域に洪水をもたらしたものもある。

これら山崩れのなかでも、ひときわ規模が大きく、飛越地震の名を後世にとどめる要因となったのは、立山連峰の大鳶山と小鳶山の崩壊であった。ほぼ南北に伸びる尾根の西斜面、現在は立山カルデラと呼ばれる凹地形の底に向かって、山体の一部が崩れ落ちたのであり、通称「鳶崩れ」といわれている。

立山カルデラは、観光コースの「立山黒部アルペンルート」が走る弥陀ヶ原の南に隣接しており、東西約6・5 km、南北約4・5 kmの巨大な凹地形である。カルデラの斜面から流れ出す大小の川の水は、集まって湯川となり、西進する湯川は、やがて南からくる真川と合流して常願寺川となり、富山平野をうるおしている。

つまり立山カルデラは、常願寺川の源流部にあたるのである。

この立山カルデラは、いわゆる火山のカルデラではなく、長いあいだの侵食作用によって形成された凹地形、いわば「侵食カルデラ」である。この地域の地質は、新第三紀の海底噴火によって堆積した火山噴出物から成っており、風化が進んで、一部は粘土化しているために、脆く崩れやすい岩質になっている。このような地質環境であるため、太古からの豪雨や地震によって崩壊が繰り返され、侵食カルデラが形成されてきたのである。

大鳶・小鳶の大崩壊によって生じた岩屑なだれは、中腹にあった立山温泉を呑みこみ、カルデラ内の湯川から常願寺川を流下して堆積した。

岩屑なだれが高速で流下したとき、無数の岩石がぶつかりあって火花を発し、その光によって、川筋が明るく見えるほどだったという。

湯川の上流部では、水流がせき止められ、多くの天然ダムを生じた。また、湯川の谷を流下した土砂は、真川との合流点に達し、真川の谷を

逆流して堆積し、高さ1000 mをこえる天然ダムが形成された。

このように、山地激震によって生じた大規模な地変は、やがて次なる大災害を誘発することになったのである。



立山大鳶山抜図（富山県立図書館所蔵）

防災リーダーの 素顔

第3回

NPO法人とちぎボランティアネットワーク

矢野正広さん

矢

野さんは、高校時代に障害者と友人になったことをきっかけに、大学で福祉を専攻し、福祉作業所に勤めながら、海外協力のNGOや障害者自立生活支援の活動を行ってきた。

そして、平成7年1月の阪神・淡路大震災では、被災した障害者のためにボランティアの送迎を行った。そのことをきっかけに、災害ボランティア活動を始め、現地の神戸市立鷹取中学校の避難所運営のため、毎週ボランティアを送り続けた。

最初はワゴン、次第にバスで送るようになる。これがボランティアバスの始まり。

「人をたくさん送るためにバスになっただけです。ただ、高校球児の

ボランティアバスは 栃木から 始まった

災害ボランティアだけでなく
地域の活性化など
継続的な支援を模索してきた
ソーシャルワーカーは
いま何を考える？



平成9年のナホトカ号重油流出事故時のボランティアバス

応援に甲子園にバスで行く。それも頭にあったかな」と笑う。

ボランティアの参加者は土曜日の夜にバスで出発し、日曜日から1週間活動、夜にバスで出発し月曜日に戻る。仕事を休んでも翌週に復帰できるように配慮した。また、バス協会に連絡して1社1台出してもらった。仕事帰りに車で集まってくるボランティアのために、駐車場の提供者も募集した。こうして、阪神・淡路

大震災では、延べ1300人を現地に送ることになった。

「社会のために役立ちたい」と思っている人がたくさんいます。災害が起こると、現地に行って何かしたい人たちが。それに応えているだけです。参加者は帰ってくると防災の意識も高まる。地域で活動するきっかけにもなりますね」

矢野さんたちは、若者の職業自立支援も行っている。地域活性化や環境学習の施設を運営し、ボランティアセンター、NPOの活動支援、基金運営、情報誌の発行など、地域での活動を進めてきた。

「災害ボランティアは、災害

がないときに、その培ったノウハウをどう維持し伝えるかが課題です。そのために中間支援団体を作ったんです」

ボランティアバスは、現地に受入れ相手がいらないと行えない。だから、平成16年の新潟県中越地震では、自分たちで現地拠点を運営した。

「現地との関係・調整が一番大事。より支援もスムーズに行えますから」

だが、矢野さんには気になることがある。

「いまの参加者は、こんな制度や仕組みがあるから参加するという人が多い。でも制度や仕組みは必要に応じて作り、変えていくもの。自分で作る力が弱くなっていると感じます」

阪神・淡路大震災から来年で15年。矢野さんたちの活動は、災害が少ないともいわれる栃木の地に着実に根づいている。



やの・まさひろ●NPO法人とちぎボランティアネットワーク常務理事・事務局長。難民問題、障害者支援などの活動から、阪神・淡路大震災を機に災害ボランティア活動を始め、平成7年、とちぎボランティアネットワーク設立。平成12年より、震災がつなぐ全国ネットワーク事務局長

日本の 知恵

を世界に

第3回

地震防災リージョナル・カンファレンス

2

2009年7月29日～30日、インド・ニューデリーで、地震防災対策についての経験や情報の共有、技術協力の推進などを目的に「地震防災リージョナル・カンファレンス」が開催されました。

この会議は、日本のODAで南アジアの5カ国(インド、バングラデシュ、パキスタン、ネパール、ブータン)を対象に実施されているERRP(地震防災対策計画)の地域ワークショップとして、また、復興の際の地域連携(南南協力)推進に向けた国際復興支援プラットフォーム(IRP)地域復興セミナーとして実施されたものです。

IRP事務局とアジア防災センター(ADRC)、国連開発計画(UNDP)、インド防災庁

アジア地域の防災を 日本とともに 考える

国際復興支援プラットフォーム(IRP)事務局とアジア防災センターは、この会議の行動目標をふまえ、専門的支援を提供し、地域内の連携を促進します。



地震防災リージョナル・カンファレンスの出席者たち

(NDMA)、南アジア地域協力連合災害管理センター(SAARC DMC)の共催で開催されたこの会議には、5カ国の政府関係者と専門家、実務者など延べ200名が参加者しました。

開会式では、ERRPの推進主体の一つ、ADRCの是澤優所長が、これまでのERRPワークショップの成果と、この会議への期待を述べるとともに、伝統的な防災知識の収集

事業など、ADRCとIRPのインドでの活動をあわせて紹介しました。

本会議では、城譲内閣府災害予防担当参事官補佐より、ERRPの事業がIRPの「よりよい復興」の理念を広げる機会となることへの期待が表明され、引き続き日本としてもIRPの一員として、この取組に貢献していくというメッセージが発せられました。また、この会議に

は、日本から地震防災対策に関する専門家が招聘されました。

岡崎健司政策研究大学院大学教授は、阪神・淡路大震災の復興状況報告のほか、日本の地震災害リスク・マネジメントの政策・手法や建築基準法を紹介しました。榎戸龍雄(財)建築情報センター研究第一部長は、復興過程の建築物再建の技術的ガイドラインの策定・普及を報告しました。

金子史夫OYOインターナショナル(株)技師長は、南アジアを事例とした地震危険度評価の取組について、渡部弘之東京海上日動リスクコンサルティング(株)マネージャーは日本の地震保険制度について報告しました。

こうした日本人専門家の報告発表には、参加者から大きな関心が寄せられ、活発な意見交換が行われました。

今回の会議では、2日間の日程を通して、地震防災対策の政策的、技術的な議論が交わされました。そして、構造的リスク削減の技術的・法的枠組み、耐震技術の普及促進手法、公共建築物の安全性確保などに関して、参加者間で行動目標を設けることに合意しました。

もし、1日前に戻れたら…

私たち(被災者)から皆さんに伝えたいこと

地震、津波、風水害……さまざまな災害を実際に体験した方に、「もし、1日前に戻れたら何をしますか?」と訊ねたのが、「一日前プロジェクト」。被災者の声は、私たちにいろいろなことを教えてくれます。今月のテーマは『台風23号(平成16年10月)パート2』です。

人に頼る避難より 自主避難を

(徳島市 50代 男性)

災害対応にあたってると、避難する側の人の心構えが大事だなと思います。「犬を飼っているの、犬を連れていってもいいか」とか、「寝る布団はあるのか」、「食うものはあるか」とか、いろんなことを言う人もいました。

市営住宅の人たちを避難させに行ったときには、消防団が車で送り迎えしてくれるというような考えでいるから、なかなか自分から動かないんですよ。みんな乗用車を持っているんだから、各戸で誘い合っかけていったらいいのに、悲しいかな、それができない。何度も車で往復しなければならず、時間もかかって大変でした。

それ以降、台風時などの出水については早目の避難ということで、住民の皆さん方には、早い形で自主的に避難をしてくださいというようなマニュアルづくりをしています。

これからは住民の皆さんが自主的に動く自主防災会のようなシステムをこしらえておく必要があると思いますね。



「いままで大丈夫だったから」 は危ない

(徳島市 60代 男性)

ずっと昔、我々がちょうど小学校2、3年生のころに、今回と同じ川の堤防が決壊して、軒下まで水が来たんです。そのときに大きな被害を受けたので、地区の人たちの台風に対する備えや考え方は十分にできていたと思いますが、「40年以上たったから、もう心配ない」というのがどこかにあったのではないのでしょうか。

平成16年は台風が特に多かった年で、5回台風が来てもなんとかなっていたものだから、6回目の台風23号の時には、「避難しろ」と言っても、なかなか言うことを聞かなかったということなんですよ。

それで大変な被害を受けたものだから、あれから、台風がくるといえば、みんな、車とかを高いところに上げています。それがいつか、「上げたけど心配なかった」になり、「もう上げなくてもいい」というようになって、危機感がだんだん薄れていかなければいいのですが。今回の水害で、『災害は忘れたころにやってくる』ことを実感しました。



危機一髪、 家を出た後に土砂くずれ

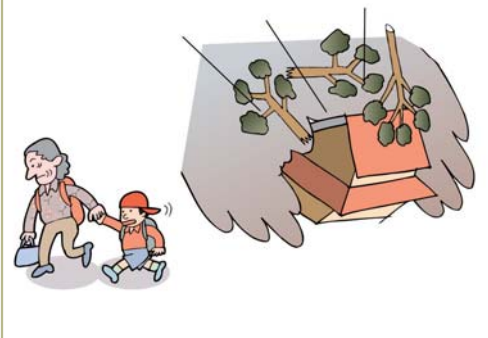
(宮津市 30代 女性)

その当時、上の子が幼稚園で、下の子が保育所に通っていました。私は仕事で、家族みんなが川を挟んでばらばらのところにいたわけです。

上の子は幼稚園が終わって実家のほうに預かってもらっていましたが、実家に迎えに行こうにも川を渡らなければならないのです。

で、実家のほうに、「雨がすごいし、川の水があふれてきているみたいだから、私の家のほうに行つて」とお願いしたんです。それから保育所のほうは主人に引き取りを頼みました。

結局、母が家を出た何分後に土砂崩れがあって、家は全壊しました。実家は一番山側にあつて、その年は結構雨が長く、何回か近くのがけが崩れていたんで、何となく「怖いな」と思っていました。早く移動してもらって、ほんとに良かったなと思っています。



<http://www.bousai.go.jp/km/imp/>

被災者の実体験を聞くことができる『一日前プロジェクト』は左記HPでも見ることができます。家庭はもちろん、地域や職場など、さまざまな話が掲載されていますので、企業の「社内報」や地域での「広報」に幅広く活用してください。

Q

家庭や地域で防災について話し合う場合、 どのようにはじめたらよいのでしょうか？

防災 Q&A

まずは、減災マップを作りながら話し合ってみてはいかがでしょうか

災害をイメージするといっても、なかなか難しいですね。自分の住んでいる地域の地図に、災害が発生したときに必要な情報を話し合い書き込んでみると、災害時の街の様子や自分や家族がどうするか、近所の人々どう助け合うかなどが見えてきます。そして、お互いのコミュニケーションもより深まります。

減

減災マップづくりとは、歩いていける範囲(半径1km程度)の地図を自分たちで話し合いながら作ってみる事です。

まず、1人、進行役を決めます。そして、住宅の単位まで細かく載っている地図を図書館などでコピーし、貼り合わせます。そこに自分の家、お年寄り、体の不自由な人、妊婦さんの家などをシールや付箋でしるしをつけ、車道、歩道、川など色を変えてなぞります。さらに自治体の発行する防災マップに従って避難場所、病院や危険情報も書き込みます。そして、災害が起きたらというシ



ミュレーションをします。できればリーダーはあらかじめシナリオを用意します。震度6強の地震・火災発生、ビルが道をふさぐ、車が炎上、液化ガス発生等々。シナリオを読み上げ、直後、5分後、30分後の行動をメモして発表してもらいます。

大半、自分は無傷で家族に連絡をとるなどの行動が多いはず。なぜケガがないといえるか、家具固定は、体の不自由な人や妊婦さんの家に声をかけたかなどを確認します。地図を作って話し合うと、どこが危ないか、子どもや老人をどう助けるか、どんな備えが必要か、わかります。

生協ではこれを「わがまち減災MAPシミュレーション」として各地で実践しています。最初は傍観者の人も、自分の地域について話し合うと熱が入ります。できればお子さんと一緒にやってください。子どもは意外と町をよく知っていますよ。

こういうシミュレーションをする時、いざというときにあわてずに行動できます。地域の人とのコミュニケーションは、互いに助け合う共助にもつながりますね。

日本生活協同組合連合会組織推進本部震災担当
亀山薫 (かめやま・かおる)

日本各地の生協で「ぼうさい塾」を開催し、「わがまち減災MAPシミュレーション」を指導する。これまで数千人が参加し、活動が広がっている。中央大学経済学部卒業。中越地震時に生協が支援する事務局を担当したことがきっかけで災害対策を専門とする。生協は災害時に車両や物資を提供している。

防災、災害に関する疑問・質問がありましたら、内閣府(防災担当)まで、はがき、FAXにてお寄せください。

専門家がいないにお答えします。
〒100-8969

東京都千代田区霞が関1-2-2

中央合同庁舎第5号館3階

内閣府(防災担当)まで

0335818933 (FAX)

眼

防災担当の記者として、日ごろ「防災の重要性」をよくわかってい
るつもりではあるのだが、いざ自身
の防災意識はと問われると「だい
ぶ心もとない気持ちになってくる。

これまで幸いにも大きな地震や火
事には無縁で生きてきた。防災と聞
いて思い出すのは小学校の避難訓練
ぐらい。防災頭巾が重くて、ずり落
ちてきては避難中に前が見えなくて
困った。突然の訓練の雰囲気にもつ
いていけない。心構えがそんな具

合なので、わたし
にとって「災害」
や「防災」は何か
ぼーっとしたイメー
ジのものだった。

大人になってそれが変わったか
と言われれば……。いざという時、
正直冷静でいられる自信はない。

そんなわたしが昨年、初めて災害
と言える状況に巻き込まれた。

2008年8月28日夜。当時、名
古屋支社で勤務していたわたしは、
東京出張から地元に戻ろうと、やっ
との思いで終電1本前の新幹線に飛
び乗った。夕方には東海地方で雨が
降り出したと聞いてはいたが、クタク
タになっていた私は、席に着くな

ちょっとした「絆」



時事通信社本社内政部
金友久美子

かねとも・くみこ ●平成17年、時事通信
社入社。社会部、名古屋支社を経て、平
成21年4月から本社内政部勤務。

り、眠り込んでしまった。

東京から名古屋までの所要時間は
2時間弱。列車は愛知県内まで入っ
ていたが、日付が変わるぐらいの時
間に急にストップした。車掌の声で
目が覚めた。「えーあのーただいま、
観測史上とてつもない大雨が降って
おります」。1時間雨量が観測史上
1位を記録し、死者3人に上った愛
知県岡崎市の豪雨災害だった。

最初は車掌の慌てた声に笑いが漏
れていた車内も、1時間、2時間と
時間が経過するにつれて、疲労感が
充満し、聞こえるのは小さな子ども
の泣き声だけになった。やがて疲れ
切ったのか、その声すら出ない。密
室と化した列車の窓に、角度のつい
た雨がぶつかっては流れる。

「ほら、これ食べな。少しずつだ
けどね」。前方のシートをのぞく
と、隣合わせた女性客が、ぐったり
とした様子の子どもたちに食べ物
分けていた。「お互い様でしょう」
と言って、近くの人の体をさすって
あげている人の姿も。そんな気遣い
が車内の雰囲気辛うじてなだめ、
落ち着かせているように見えた。

集中豪雨で直接的にひどい被害を
受けた人もいただろうし、豪雨に限

らず、もつと厳しい災害現場はいく
らでもあると思う。が、いつ終わる
ともされない缶詰状態で、物もな
く、手段もない。もちろん、訓練も
ない。見知らぬ者同士、いつ終わ
るともしれぬ疲労と緊張の中で、
ちょっとしたコミュニケーションが
互いを助けている姿を目の当たりに
するのは、わたしにとってはとても
印象的な出来事だった。

もちろん、災害に対する心構えや
訓練を怠るべきではない。危機は忘
れたころにやってくる。しかし、防
災という闘いの中で問われているこ
とは、実はわたしたち人間同士の
「絆」なのではないのだろうか。そ
してそれはまさに、常日ごろから備
えておくべきものではないのだろう
か。

2009年9月1日。防災服を着
た閣僚が1人、また1人と官邸に入
る。今年の「防災の日」にはこの日
だけで31都道府県で約79万5000
人が参加したという。

突然、防災のプロにはなれない
が、できる限り誠実に報じていき
たい。見たことを書き、感じたこと
を伝える。それが災害に強い社会づく
りにつながると信じて。

● 編集・発行
内閣府 (防災担当)
〒100-8969
東京都千代田区霞が関 1-2-2
(中央合同庁舎第5号館3階)
TEL: 03-5253-2111 (大代表)
URL: http://www.bousai.go.jp/
E-MAIL: info@kouhou-bousai.jp

ご意見・ご感想を、内閣府
(防災担当)広報『ぼうさい』宛で、
はがき、FAXにて
お寄せください。

● 編集協力
株式会社ウィズダム
〒164-0011
東京都中野区中央 5-40-18
キャピトル丸山 4F
TEL: 03-5341-8171
URL: http://www.wisdom-tie.com

● デザイン
有限会社ケイズハンズ

● 印刷・製本
メディアランド株式会社
printed in Japan

『ぼうさい』11月号は平成21年
11月末発行の予定です。

編集後記

浜松市で開催された防災フェアでは、地元の方と接してみて地震に対する備えをしている方が多いなと感じました。地震が起きるぞと毎年言われ、うんざりしているところかなと思っていたのですが、結構、意識もたれていることに興味しました。たぶん、10日前に結構大きな地震が発生したことにもよるものと思いますが、平日頃の備えはしておくことにもつながり、さらには、最近の新しい防災グッズも開発されている中、そのようなものに興味を持って備えをしていくことが、備える心を持続していくことにつながるのかなと感じました。(宮)

『ぼうさい』購読のご案内

本誌の購読をご希望の方は、(株)ウィズダムまでお申し込みください。お申し込みは電話、FAX、メールにて承ります。

TEL: 03-5341-8171
FAX: 03-5341-8172
E-mail: shiga@wisdom-tie.com

1冊 300円 (税込み)
※送料別途: 1~5冊 80円
5冊以上 160円または実費

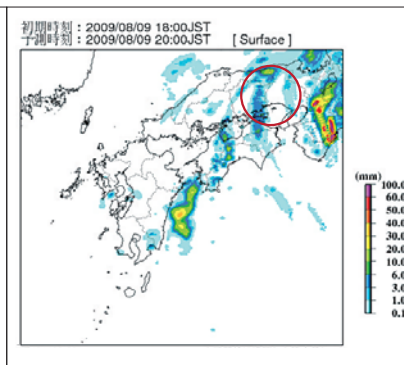
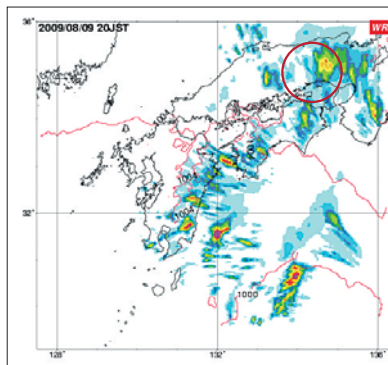
防災技術 Front Line

ゲリラ豪雨を予測する SYNFOS-3D

これにより、約3~6時間格子で1時間ごとに予測計算を行う。

近年、ゲリラ豪雨と呼ばれる局地的な大雨により、浸水害や土砂災害が相次いで発生している。

財団法人日本気象協会
は、新たな総合数値予報システム「SYNFOS-3D」の運用を今年の7月より開始した。



兵庫県佐用の大雨の予測
(平成21年8月9日20時、初期値8月9日18時)
左: SYNFOS-3D
右: 従来の当社予測 (SYNFOS)
右下: 実況 (レーダーアメダス解析雨量)

図提供: (財)日本気象協会

間先の降水や局地的な大雨の予測など、より正確な雨量予測情報が提供され、住

民の安全安心の確保に貢献することが期待されている。

Schedule

8月~9月の動き

- 8月21日~24日 防災フェア2009 in はままつ (浜松市)
- 8月23日 第5回全国防災まちづくりフォーラム
- 8月30日~9月5日 防災週間
- 9月1日 平成21年度「防災の日」総合防災訓練
- 9月2日 平成21年防災功労者内閣総理大臣表彰式
- 9月3日 平成21年防災功労者防災担当大臣表彰式

10月~11月の予定

- 10月1日 大規模水害対策に関する専門調査会 (第17回)
- 11月上旬 平成21年度原子力総合防災訓練

作品募集

みんなに伝えよう 防災の心

第25回防災ポスターコンクール

内閣府は、平成 21 年度の防災週間行事の一つとして、広く一般から防災に関するポスターデザインを公募し、防災意識の高揚をはかり、「日頃からの具体的な備え」を実践する国民運動を展開するために「第 25 回防災ポスターコンクール」作品を募集します。昨年度は全国各地から合計で3994点のご応募をいただきました。

■ 募集対象（応募区分）

- ① 幼児・小学 1～4 年生の部 ② 小学 5・6 年生の部
- ③ 中学生・高校生の部 ④ 一般の部

■ 募集作品

- 地震、津波、火山噴火、台風、豪雨、豪雪などの自然災害を対象とした「防災」に関するもの（火災による災害は除く）
- 例えば次のようなテーマ：自然災害の恐ろしさの認識と正しい知識、家庭・地域・職場・学校等での防災に関する日頃からの心構えや備え、防災訓練や防災ボランティア、自主的な防災活動への積極的な参加など

- これらのテーマを連想させる標語を入れた個人の作品で未発表のもの
- 幼児・小学 1～4 年生の部は、標語のない絵画だけでもかまいません
- 用紙：A3 判以上 A2 判以下の大きさの画用紙、ケント紙、印画紙。画材・色数は自由。パソコン等を使用した作品も可

■ 応募締切：平成 21 年 10 月 30 日（金）
（当日消印有効）

■ 送り先・問合せ先

〒150-0043 東京都渋谷区道玄坂
1-22-10

若葉ビル 6 階

「防災ポスターコンクール事務局」

TEL 03-3780-1830

<http://www.bousai.go.jp/poscon/>

（主催：内閣府、防災推進協議会）



※防災推進協議会は昭和 57 年設立、日本赤十字など 68 団体で構成

第 24 回防災ポスターコンクール入賞作品 [平成 20 年度]



防災担当大臣賞
小学 5・6 年生の部
静岡県
森町立宮園小学校 6 年
高木 和人さん



防災担当大臣賞
中学生・高校生の部
石川県
金沢市立鳴和中学校 3 年
白石 くるみさん



防災推進協議会会長賞
幼児・小学 1～4 年生の部
愛知県
だれでもアーティストクラブ
幼児
岩川 萌さん



防災推進協議会会長賞
小学 5・6 年生の部
青森県
八戸市立江南小学校 6 年
中村 有里さん

「震度 6 強体験シミュレーション」

大地震への予防や避難を体験しよう

— 地震に対する予防行動・避難行動ロールプレイングゲーム —

これは震度 6 強の地震に対して「どんな予防対策をとらなくてはいけないか」「どんな避難行動をとるべきか」疑似体験するロールプレイングゲームです。

パソコンで、地震に対する予防行動・避難行動をかたんに知ることができます。ご家庭で、学校で、ぜひ体験してみませんか。

こちらにアクセスを <http://bosai.marvista.jp/>

